



図4-2 田嶋栄次郎



図4-1 瀬谷啓

## 第4章 田嶋栄次郎と日本軍の曲阜占領

はじめに

中国では日中戦争初期の一九三八年、山東省南部の滕県、台兒庄を戦った旧日本軍瀬谷支隊（歩兵第三旅団を基幹）とその長である瀬谷啓少将の名前がよく知られている。言うまでもないが、これは正面戦場における対日作戦の初の勝利とされる、「台兒庄大捷」宣伝のおかげである。

瀬谷啓（一八九一―九五四）は、栃木県出身で日本の陸軍軍人（図4-1）<sup>1</sup>。最終階級は陸軍中将。一九一〇年陸軍士官学校（三期）、一九一八年一月、陸軍大学校（三期）を卒業し、陸軍省、陸大教官、歩兵第一三聯隊長などを経て、一九三七年八月日中戦争勃発の直後に少将に昇進している。ペナランの指揮官のようなが、実際の戦闘経験は一九三八年三月から一九三九年一〇月、瀬谷支隊を率いて華北、華中の戦場で転戦した約一年半だけである。台兒庄の戦いは瀬谷啓の実戦経験の最初であり、その後も噂された間諜「処罰」を受けたのではなく、さらに徐州、武漢で戦い、一九三九年一〇月中将に昇進し基隆要塞の司令官に転出している。一九四〇年八月、五二歳で一旦子備役に編入されたが、戦局が緊張化した一九四四年、ふたたび召集を受け、満鉄警護司令官、朝鮮羅津要塞司令官に就任し、敗戦後シベリア抑留となり、中国に送還された一九五四年五月、自決して自ら生涯を閉じた<sup>3</sup>。

瀬谷啓は一九三八年三月八日、中国の山東省曲阜で田嶋栄次郎の後任として歩兵第三旅団長に就任してから、田嶋支隊は瀬谷支隊に名前が変更し、台兒庄での「敗北」のおかげで、中国では大変な有名人になっている。また、

瀬谷は岡山に本拠を置く歩兵第三旅団の長だったが、中国の戦場で就任し、中将昇進後すぐ台湾に転出したため、地元の岡山とは無関係の人物である。一方前任の田嶋栄次郎（一八三二―一九五二、陸士一八期、陸大二期）（図4-2）<sup>1</sup>は一九三五年三月陸軍少将に昇任し、第五師団司令部附を経て、同年一月岡山の第一〇師団歩兵第三旅団長に就任している。岡山の滞在は一年半以上も続き、広瀬町の旅団長官邸（元第一七師団長官邸、現在旭公民館）に住み、毎日騎馬で津島の旅団司令部に通った、とい<sup>5</sup>。その前一九二七年から一九三〇年、岡山の第一〇聯隊の聯隊附（中佐）として長く「第六高等学校服務」を務めた経験もあったため、岡山の地元と縁の深い人物である。

一九三七年七月盧溝橋事件のあと、田嶋は第三旅団（歩兵第一〇、第六三聯隊を基幹）を率いて津島の官舎から出征し、天津大沽口で上陸したあと、津浦線（天津から南京の鉄道）に沿って南下作戦を進め、静海、馬廠、滄県、徳県を攻略して二月末、天險黄河を渡河して山東省に入った（図4-3）<sup>6</sup>。二月二十七日済南を陥落させてからも南下追撃戦を続け、一月四日、孔子の故郷曲阜を占領してここに司令部を構え、配下の二つの聯隊も曲阜、鄒県（第六三聯隊）、大汶口、新泰、蒙陰（第一〇聯隊）一帯に散らばってしばらく守備態勢にはいった。

田嶋少将の中将昇任（三月一日）と異動は瀬谷支隊が南下して「南部山東剿滅作戦」（台兒庄作戦を含む、地方掃蕩）を行う直前であり、その前二月三日、不慮にも曲阜南方の小雪村で四川軍第一二七師の部隊による襲撃を受け負傷した。負傷と異動が重なるため、長い間中国では、田嶋少将は伏撃戦で死亡したという説が流れ、四川軍があげた金星としてこれまで語り継がれてきた。しかし、もし本当であれば、

姜 克 實



図4-3 私服偵察の旅団幹部



図4-4 田嶋の中將昇進辞令

日中戦争がはじまってからの、現役少将の戦闘死亡の第一号になり、日中両

方において大ニエースになるはずである。また田嶋の中將昇任も決して負傷したためのご褒美ではなく、負傷の時点を少将の経歴は満三年に近づき、この場合、よほどの過失がない限り、年功序列の昇任は日本軍の慣例であった。すなわち、三月一日の中將昇任と部署異動の人事は、負傷前すでに準備されたものといえる(図4-4)。

ちなみに日中戦争中、大陸で「戦死」した日本軍現役少将の第一号は、一九三九年六月十七日第五歩兵団長田路朝一少将(陸士一九、陸大二九期)である。田路の場合は飛行機の墜落による死で、本当は事故か、撃墜かさえ定かではない。にもかかわらず、現役少将の死亡の第一号となるので、日本で「戦死」と報道され、中国では大変有名な話になった。

本章は主として日本の記録史料を中心に、田嶋榮次郎という人物の目的を絞る。小雪山の遭難状況および一九三八年一月から三月、部隊の曲阜支配時期における人間模様を明らかにし、合わせて戦争記憶の方法にも、一石を投じたい。

### 1 小雪山、鬼村の戦闘について

#### (1) 中国側の記録

手はじめにまず、中国側における田嶋少将死亡の伝説を見よう。時間序列順に記録をまとめると、次のようである。

#### ①熊順義「滕県血戦紀実」

……二七師七五七団の王文抜団長は第一、二營を率いて、二月一四日午前〇時頃、小雪山の東で曲阜方面からきた日本軍の乗用車三両を見つけた。……三〇分間激戦の末、日本侵略軍機谷師団の少将田嶋榮次郎以下十五名全員を射殺し、軽機関銃二挺、拳銃三挺、乗用車三両及び軍用地図、書類、作戰資料数束などを鹵獲した。我軍の死傷はわずか三名である。同日午後二時、鬼村附近において、我がゲリラ部隊は曲阜方向に猛進してくる日本軍のトラック一台と数十名の敵を発見し、……激戦の末、敵二五名を射殺し、軽機関銃一挺、小銃一八挺、トラック一台、無線機一台、軍用地図一セットを鹵獲し、我軍には死傷者はなかった。

作者の熊順義は当時国民党第二〇集團軍(四川軍)第四一軍第一二四師三七二旅第七四三団の団長だったが、この部隊は事件の当事者ではない。どのような根拠で記されているかは不明であるが、これらの日時、死傷者数、鹵獲品などの基礎データは、のちのいくつかの「小雪山、鬼村の戦闘」の記録の原型になったようである。

#### ②「曲阜市誌」大事年表

一九三八年二月二日、国民党第二二集團軍第一二七師七五七団の二個營(中隊)の部隊は、团长王文抜の指揮の下で、曲阜、鄒県間に位置する小雪山、鬼村の二箇所で伏撃陣を仕掛け、一四日午前、小雪山において、南進する日本の乗用車三両を襲撃、撃破し、日本軍少将中島榮吉以下一五名を射殺した。午後、鬼村で日本軍の北進するトラック一両を撃破、日本軍二五名を殲滅した。翌一五日、曲阜、鄒県両地駐在の日本軍は大規模な報復掃蕩を行い、……小雪山の民家千軒に放火し、村民三名を惨殺した。

ここの日付け(二月四日)、戦果の統計数字は前資料とほぼ変わらないが、少将の名前だけは田嶋栄次郎ではなく「中島栄吉」と記録されている。

③高洪富「小雪、鬼村伏撃日軍紀実」

一九三八年二月一日、国民党第二二集团軍(四川軍)第四五軍二二七師第七五七団の王文拔団長は、命令を受け……曲阜、郷県の山地に入り、二日、第七五七団の二個管は地方武装部隊の協力の下で、曲阜、郷県間の小雪村、鬼村付近で道路、橋梁を破壊し、日本軍の伏撃を計画した。……一四日午前一〇時頃、日本軍の乗用車三台は、曲阜から小雪方向に行進し、破壊した道路に停車し偵察している間、我軍に包囲され、接近戦になった。……三〇分間の激戦のあと、日本軍磯谷廉介師団少将中島栄吉を始め一五人全員を殲滅し、乗用車三台、および軽機関銃二挺、小銃三挺、拳銃三挺のほか、軍用地図、書類、作戰資料一式などを鹵獲した。戰場整理した時、意外にも敵少将田嶋栄次郎の死体を発見した。この戦いで中国軍側の死傷はわずか三名である。

同日午後二時、郷県駐在の日本軍数十名、トラツク一台に乗車して郷県、曲阜道路に沿って北進し、鬼村付近で破壊した道路に阻まれ停車した。応急補修を準備している間、我伏撃部隊の攻撃を受け、倉皇に応戦した。……この激戦で二五名の日本軍が死亡し、軽機関銃一挺と小銃一八挺、トラツク一台、無線機一台、軍用地図一束と敵の後方連絡図一枚が鹵獲され、我軍には死傷者がなかった。

描写はやや詳細になったが、基礎データは①の熊の記録とほぼ同じである。

④韓信夫「鑿兵台見庄」

四川軍「第一二七師第七五七団の王分抜団長は、命令を受け……曲阜、郷県の敵後方の山地でグリヲ戦を展開していた。二月二日、第七五七団の二個管と地方武装部隊と協力して曲阜、郷県間の小雪村、鬼村付近で日本軍の伏撃を計画した。……一四日午前十時頃、磯谷師団の少将田嶋栄次郎は一九三七年式の新型乗用車に乗り、四〇人余りの護衛と装甲車一両がこれに同行して……両下店陣地を視察するため、曲阜郷県の道路に沿って南下し、小雪村に設けられた我軍の包囲網に入った。……三〇分間の激戦のあと、敵の銃声が聞こえなくなり、……我軍が敵陣に突入した。この戦場で、日本軍一五人が死亡し、我軍は敵の軽機関銃二挺、小銃四〇挺、トラツク二台を鹵獲した。戰場整理した時、意外にも敵少将田嶋栄次郎を発見した。田嶋は全身血だらけで……絶望的な目つきで我が戦士を眺めたあと目を閉じ、後送する担架の上で絶命した。

同日午後二時、鬼村付近で我グリヲ部隊は郷県から曲阜に猛進した敵数十名を載せたトラツク一台を見つけ……この伏撃戦で敵二五名が死亡し、軽機関銃一挺と小銃一八挺、トラツク一台、無線機一台、軍用地図一束、敵の後方連絡図一枚を鹵獲され、我軍に死傷者はなかった。

この記述は一番詳細であるが、証拠を示しておらず、基本データは①の熊順義の記録と大同小異なので、熊の記録を元に加工した故事と思われる。

以上は最近まで中国大陸で伝えられる小雪、鬼村の戦いについての主な記録で、どちらも根拠の出所を示しておらず、少将旅団長の死亡説は最大な特徴である。内容からわかるように、基本データとなる内容(日にち、場所、死亡者数、車輛、鹵獲品)に大差はなく、最初に出た熊順義の話をもとに再現したものである。

一方、田嶋が死亡しておらず、負傷していた報道は、戦前からすでにあり、上海『大公報』の戦地特派員楊紀

(別名張蓬舟)は後の総括記事において「民国二七(一九三八)年二月三日第一〇師団第三旅団長田嶋栄次郎は曲阜において負傷した」と記録している<sup>(13)</sup>。最近では、胡卓然が「侵華日軍襲命の将」第一考の文章において、楊紀の一九三八年一月九日の報道を引用し、田嶋栄次郎は死亡したのではなく「負傷」した、と指摘している<sup>(14)</sup>。同じ説は、当時の有名な戦地記者龍長江の報道にもあり、範は、小雪村で死亡したのは、田嶋栄次郎ではなく、その通訳官中島栄吉だ、と説明した<sup>(15)</sup>。前出「中島栄吉」の名前は、そもそも范長江の報道から得られたようである。これを見ると、田嶋栄次郎の死亡説は参戦部隊や地元の間で流布した不確実な英雄話で、一旦戦地報道によって訂正されたものの、戦後になって再び抗日宣伝、歴史教育の題材に利用され、その後定着したようである。真実かどうかとはにかく、大物の旅団長を「死亡」に処したことは、格好の宣伝材料であろう。田嶋栄次郎は果たして小雪村で死んだか、最近になってこの歴史の懸案を取り上げる動きが現れ、二〇二二年五月二五日、新疆电视台(テレビ局)の番組「劇劇有戲・四川軍擊斃日將之謎」に取り上げられた。

### ⑤ 劇劇有戲・四川軍擊斃日將之謎<sup>(16)</sup>

あらずじは次のようである。

一九三八年二月某日、四川軍第一二七師の斥候馮玉森は、三日後鄒県で「皇軍・良民懇親会」を開き、曲阜から日本軍の重要人物も参加する、との情報を手に入れた。この情報に基づき管長陳九章を中心に鄒県、曲阜間の道路で伏撃戦を行う計画が準備された。

当日、日本軍はトラック一台に軽機関銃一と二十数名の護衛兵を載せ先行し、後続の乗用車とともに伏撃圏に入った。激戦の末、日本軍の部隊はほぼ全滅し、伏撃を行つた四川軍の兵士は戦場整理の時、乗用車に死亡した将校らしい人物の死体を見つけた。長靴には金色の拍車がついていた。この兵士は死体から軍刀だけを抜き取り、軍靴の拍車に気を止めることなく、死亡者を軍曹として報告した。ところがその三日後、曲阜と鄒県の両地で第三旅団長田嶋栄次郎を送る「追悼会」が開かれた消息を知り、陳九章からはじめて自分たちは大金星をあけたことに

気がついた、という。

番組ではこの件について検証し、一、死体の長靴に將軍の階級を表す金色の拍車がついていること、二、三日後、送る会(追悼会と解釈されている)が開かれていたこと、三、日本で出版された戦史叢書『支那事変陸軍作戦』(二)にある第二軍の人事異動記録(瀋谷少將の第三旅団長の就任)の三点から、田嶋栄次郎は確かに戦死したと判断している。

一方、歴史の記録も無視しておらず、戦前から范長江記者の説も紹介し、この人物はもしかすると通訳の中島栄吉である可能性も示唆した。結局、懸案は解けず、番組は終了した。

### ⑥ ルポルターージュ『抗日戦争中の川軍』

もう一つの話を紹介しよう。何允中作『抗日戦争中の川軍』という作品である。大衆向けのネット文学で活字になつていないようだが、作者何允中は滕県の戦闘にも参加した、四川軍一二師副団長何燦棠の子息で、定年後先輩志士の抗日事績を顕彰すべく、自ら資料調査を行い、また四川軍の戦士、後人から証言を集めまわつた。文学作品のような描写であるが、今まで知られていない新しい情報もあつた。日本の記録資料からも左証できる内容も含まれているので、ここで紹介しよう。ちなみに、何の『抗日戦争中の川軍』は、前記テレビ番組の「劇劇有戲・四川軍擊斃日將之謎」の素材にもなつたようである。

一二七師七五七団の斥候班馮玉森は鄒県城内で三日後「皇軍良民懇親会」の情報を手に入れ、管長陳九章(重慶市隆昌人)に報告した。伏撃地点は交通要道にある「小薛村」に定め、作戦は秘密裏に準備された。……当日は濃霧だつた。九時過ぎ、濃霧が晴れ、二〇人の「鬼子」を載せ、軽機関銃一丁を装備するトラックが現れ、後ろに迷彩塗りの乗用車がついていた。

村の入り口で、トラックは障害物に阻まれ、進退難谷のところ、四川軍による一斉射撃が浴びせられた。この射



また、「将官」以上の階級が金色の拍車を着用することは、明治時期の軍隊にある古い規定で、主として階級を表す必要がある儀式時の装備であった。大正一〇（一九二一）年になるまで、実用的ではない、「破損し易い」などの理由でこの規定が改められ、将官でも「従軍ノ時及普通ノ勤務演習等ニ在リテハ銀色金属（無色の地金）が奨められるようになっていた。<sup>17)</sup> 以上のように、もし死んだ通訳中島栄吉が長靴を履いたとしても、乗車するため拍車をつける必要は考えられない。本物の将軍（田嶋）も死んでいないので、したがって「金色の拍車」は、すべて架空のつくり話であろう。

吉通訳も乗用車に乗っており、わざわざ乗馬用の拍車をつけて車に乗ることは話の辻褄に合わない。拍車は乗馬用の道具で、アメリカン・カウボーイの革靴のように革靴と一体化するものではない。乗馬する時だけ、図4-6のようにバンドで革靴につけるが、普段はつける必要はない。小雲伏撃戦の際、田嶋旅団長も中島栄吉通訳も乗用車に乗っており、わざわざ乗馬用の拍車をつけて車に乗ることは話の辻褄に合わない。

話としては面白いが、やはり虚構の故事ではないかと筆者は思う。この説を下ラマチックに展開させていった。何の話には「金色の拍車」の物語が出て、多くの関心者の心をとらえ、テレビ局の番組もこの話を中心に田嶋栄吉の

「神話」が、このように多くは口伝、記憶から生まれ、さらに政治的宣伝によって輪をかけて膨らんでいったのである。真に近いが、どちらも当時の記録資料によるものではなく、記憶、口伝に基づく事実還元であろう。抗日戦争の話と後出の何允中の話の二通りがあると考えられる。熊の話より、当事者への聞き取り調査を経た何の話はより事以上は小雲村事件に関する中国側の記録である。話として色々の版本があるが、情報源は概ね、前出の熊順義の⑦「金色拍車」考

作者の何によると、この内容は一九八五年、四川軍の元排長潘近仁から聞き取った話であるようで、潘は「もし游倫が健在であれば、今年は七〇に近いだろう」と付け加えたという。あとで日本軍の記録を見れば、この少年の存在は事実であることがわかる。何の調査は聞き取りであるが、車輛は二台、兵員は二〇名、即死者は七名、天候は晴れではないこと、民家への避難、中国人少年の存在など、これまでもの記録より正確な情報が多い。

一日後曲阜に戻された。二歳、曲阜小学校の生徒で、家は城内の裕福の大家であった。金拍車をつけた人物は、曲阜駐在の日本軍少将旅団長田嶋栄次郎で、尤家の前庭に駐在していた。その日は日曜日で、游倫は家で遊んでいたが、兵士佐藤に誘われ乗車し、郷里で「親善會」を見物に同乗した、という。游倫少年はその後、四川軍の司令部に移送されたが、その晩、この少年の口からやごと、自分たちが金星をあげたことがわかった。少年の名前は「游倫」という。一銃、拳銃十数挺を鹵獲して、特別捕虜（少年）一名も捉え、我が方には死傷はなかった。

抛（金色の拍車）がないので、鬼子一名、殲滅と記録した。戦闘は中国側の全勝であり、敵死者のほか、小拍車に気を止めなかった。戦果報告において、指揮官を証明する証た。捜索の兵士は軍刀を戦利品として持ち帰り、軍靴にある金色の軍刀を下げ、顔から血を流した年長の鬼子の死体が横たわっていた。……泣きだした。乗用車の中には、……ラシヤ製軍服は乗用車に接近した。車下から一人の金持ち風の中国人少年が、戦場整理のため戦士たちに出て、戦友を顧みず一目散で逃走した。戦場整理のため戦士たち生きて残った一部は付近の民家に逃げ込み、敵軍の壁を乗り越え村外撃を受け七人の鬼子が即死し、乗用車にも手榴弾が投げ込まれた。



図4-5 大沽口上陸の田嶋少将<sup>17)</sup>

(2) 日本側の史料と記録

①「歩兵第十聯隊史」の記録(小雪の戦闘)

以上の中国側の記録に対して、日本側においては戦闘詳細に基づくと複数の記録が見られる。記憶ではなくほとんど当時の記録資料かそれに基づいて書かれたものなので信頼性は高い。また同事件の関係記録は一つではなく複数が存在するので、総合すると戦闘の全過程を隅々まで把握できる。とくに時間、場所、天候、結果統計など重要な情報について、複数の記録による照合もでき精度は高い。これらに従って、一九三八年二月三日(旧暦正月四日、日曜日)小雪、鬼村で行われた西戦闘を還元してみよう。

まず、小雪の戦闘について、「歩兵第十聯隊史」には次のように記す。

二月三日、第三旅団長田嶋栄次郎少将が、南下各部隊監視の途次、曲阜南方八軒の小雪で同日午後一時頃、四川軍第二七師の約二〇〇〇名に急襲された。同地方は一応占領地下であったので、護衛兵も軽機、小銃各二箇分隊を二台のトラックに乗せ、先頭を旅団長乗用車が進んでいた。当日はそぼ降る小雨であった。小雪部落に入らんとした時、いきなり村はずれの望楼上より急射撃と手榴弾が叩きつけられ、あっという間に護衛の二箇分隊は倒された。乗用車にも弾丸が集中し、田嶋少将も左大腿部に被弾した。生残った者は辛うじて近くの民家に避難したが、それは旅団長、次級副官来栖武一少佐、通信班班長登東洋夫中尉、伝令の安井上等兵、護衛分隊の古川曹長以下五名、通訳、同盟通信の記者三名のみで、古川曹長は手榴弾の破片が大腿部に食込み出血が激しく、安井上等兵も足に銃創を負っていた。小銃は三挺しかなく、満足な兵もまた三名しかいなかった。次級副官はこれら三名の兵に旅団司令部への連絡を命じた。もちろん三銃とも持って行った。あとには小銃は一つもなく、拳銃が二挺あるだけである。三人の兵は敵の射撃のなかを縫うて脱兎の如く脱出した。敵はこの民家に小銃、機関銃、手榴弾の集中火を呼びよせてくる。またも手榴弾一発が投込まれ、爆発寸前、登中尉がこれを拾って投げ返した瞬間、轟然と爆発、兵と通訳が即死し、登中尉の右手の指はバラバラになって鮮血がふきだしている。かくて滴

足なのは来栖副官と兵二名、同盟通信記者三名のみとなった。これより先、旅団長の乗用車を運転していた今井上等兵は、敵急襲の直後、曲阜の旅団司令部に急を報せるべく、懸命に走り、曲阜に辿りつくやパッタリ倒れた。仰天した高副官奈良正彦中佐は直ちに野戦倉庫のトラック六〇台で一箇大隊を救援に向わせ、自らはトラックの出発を待たず伝騎をつれて馬を現地に飛ばした。救援隊は午後五時三〇分小雪に到着、敵はそれを見て逃走したが、旅団長以下寡兵よく四時間を頑張り通していた。我が方の戦死者兵六、通訳一、同盟通信記者一、負傷旅団長、通信班班長のほか下士官一、兵六名に及んだ。済南攻略後、南部山東省駐留間、戦闘としては蒙陰、大事件としてはこの田嶋旅団長の遭難が特筆される。田嶋

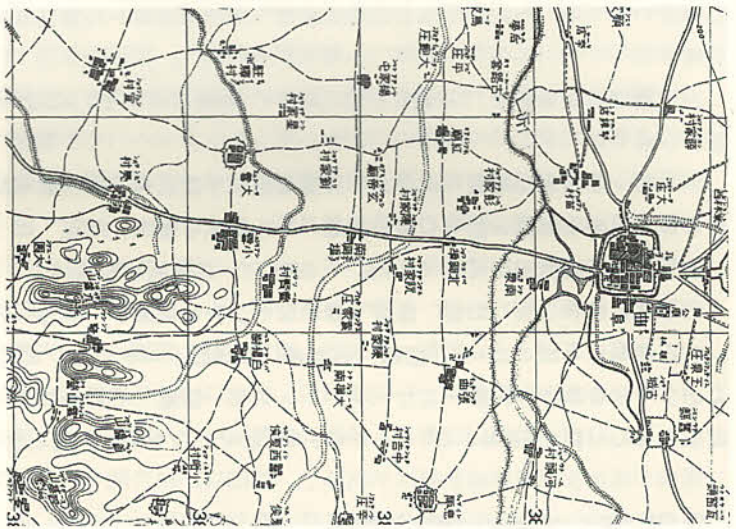


図4-7 曲阜と小雪、鬼村(日本軍の地図より)

歩兵第一〇聯隊はこの時大汶口に本部を置いており、事件当事者の部隊ではないが、聯隊史にはこの当時の大事件について詳細な記録を残していた。聯隊史編纂の時、後に触れる寺島記者の記事を参考したと思われる。以上から確認できる事実は以下の諸点である。

一、事件の日には一九三八年二月三日、戦闘の開始は午後一時頃で、天候

は小雨であった。また旅団長の出動目的は、南方に位置する郷具駐在の部隊（歩兵第六三聯隊）を「監視」するためであった。

二、敵は四川軍第二七師の二〇〇名で、友軍の兵力は二台のトラックに分乗している「軽機、小銃各二箇分隊」であった。

三、近くの民家に避難したのは、田嶋旅団長一行四人、古川曹長以下護衛五名、通訳一、記者三の合計三人で、その中に三名が救援を呼ぶために脱出し、手榴弾の爆発で通訳、兵一名は死んだ。

四、被害状況は死亡八名（含通訳一、記者一）、負傷九名である。

この資料について、日時、時間、被害についての基礎データは正確だと思いが、それを加工した過程の描写にいくつかのミスが見られる。「軽機、小銃各二箇分隊」とすれば、兵四〇名の戦闘力となり、これは死傷者の数に合わない。後の資料を参照すれば、トラック一台、軽機、小銃が合わせて二分隊の方が正しいであろう。また通訳中鳥柴言はじで（乗用車中か、トラック中か）死んだのかも、異議が残る。

## ② 歩兵第六三聯隊史（鬼村の戦闘）

次は『歩兵第六三聯隊史』を見よう。第六三聯隊第一大隊は当事者の部隊であるが、この日の戦いに関する戦闘詳細は今残っていない。聯隊史を見ると、編纂の段階（一九七四年頃）では詳報がまだあるようであるが、聯隊史はそれを採録しなかった。代わりに記したが、田嶋旅団長一行の様子ではなく、聯隊主力（郷具警備隊）側の記録である。

郷具警備隊側は、事前に田嶋の監視情報を得ており、旅団長は予定時間に到着しなかったため、その身の安全を案じて、情報をつかめないまま曲阜方向に迎えるの小部隊を出発させた。この部隊は小雪村南二キロの鬼村で同じく四川軍の部隊に待ち伏せられ戦闘になるが、これがいわば「鬼村の戦闘」である。ちなみに鬼村はかつて聖子孟子の生誕地であり、翌日聯隊が掃蕩を行った四基山は、孟子家先祖の陵墓が入った神聖の山である。以下は記録の内

容である。

鬼村（郷具北方約九軒）および四基山（郷具東北方約一〇軒）附近の攻撃

二月三日支隊長田嶋少将は、副官と通信隊長を帯同し、郷具警備隊視察のため少数の掩護部隊とともに自動車に搭乗し正午曲阜を出発した。午後二時にいたるも一行は郷具に到着せず、郷具、曲阜間の有線電話は不通となり、一行の動静は杳として不明となった。

警備隊長（聯隊長）はその状況糾明のため、高井兼雄少尉以下「中隊」の小銃、軽機各一分隊を自動車をもって現地に急派し、追って午後四時過ぎ曲阜の支隊司令部から、支隊長一行は遭難の虞あるとして部隊急派要請の電報が飛来し、7主力は現地の状況に応じ機宜の行動をとるよう命ざされ、郷具―曲阜道を急速北進していった。前進の高井少尉は前進中敵兵を見ない、沿道は平常に変わらない景観、午後三時三〇分ごろ鬼村の南門前に到着し、南門は鎖ざれ周辺は極めて静寂、斥候をもって搜索しつつ前進し、部落の中央部附近において東、西、南の三方から急射を受け停止して抗戦した。敵兵はしだいに増加して約四〇〇となり、高井隊は死力を尽くして応戦し、軽機手はほとんど死傷し最後の兵は軽機の破損とともに敵中に突入し戦死している。斥候は北門を占拠し北門外の家屋に拠つた五、六〇の敵を駆逐したが、新たに敵兵は東西両面から各約百名を来攻し、斥候長以下よくその家屋を占領し力戦固守していた。さしもの敵も午後五時三〇分ごろ退却を始め鬼村東方高地方向に逸走、高井隊は兵力を集結し抗戦の態勢を固めた。

支隊長一行の状況は依然不明、後の調査によると、高井隊は少数の兵力をもって敵に遭遇して抗戦したが、約五〇〇の敵兵は統制なき分離した兵力であつたためよくこれを撃退し、その地点の北方約二軒半の小雪附近において支隊長一行を襲撃した敵を牽制し得て大事にいたらなかつた客観的の効果は特筆に価する幸運であつた。

7主力は午後七時鬼村に到着して高井隊を掌握し、部落を確保して索敵に努め、一部を小雪に派遣したが敵兵は隻影も見えない。支隊長一行の動静は依然不明のまま。午後六時三〇分支隊司令部から登州を經由し、支隊長一

行は午後〇時三〇分ごろ小雪においで約五〇の敵と遭遇し、支隊長負傷、随行者将校以下戦死八名、負傷者八名の状況がはじめて判明した。

警備隊長はこれを7長に通報するとともに、鬼村東西一帯の掃蕩と戦死傷者收容の部署をなし、II(第二大隊)(6、7、8、MG(機関銃三分隊、21A(天隊砲)小隊欠)は午後九時過ぎ郷県を出発し、S(衛生隊)の傷者收容隊は掩護部隊とともに自動車をもってこれに続行し、夜半前鬼村に到着し、II長は7を掌握し、西方の宣村西北方の大雪を掃蕩し、至敵な警戒態勢をもって夜を徹した。Sの傷者收容隊は戦死傷者を收容し、翌一四日の中夜郷県に帰還した。

鬼村の戦いで最初に待ち伏せ攻撃を受けたのは、高井少尉が率いた軽機、小銃二個分隊合計約二〇名で、トラッ

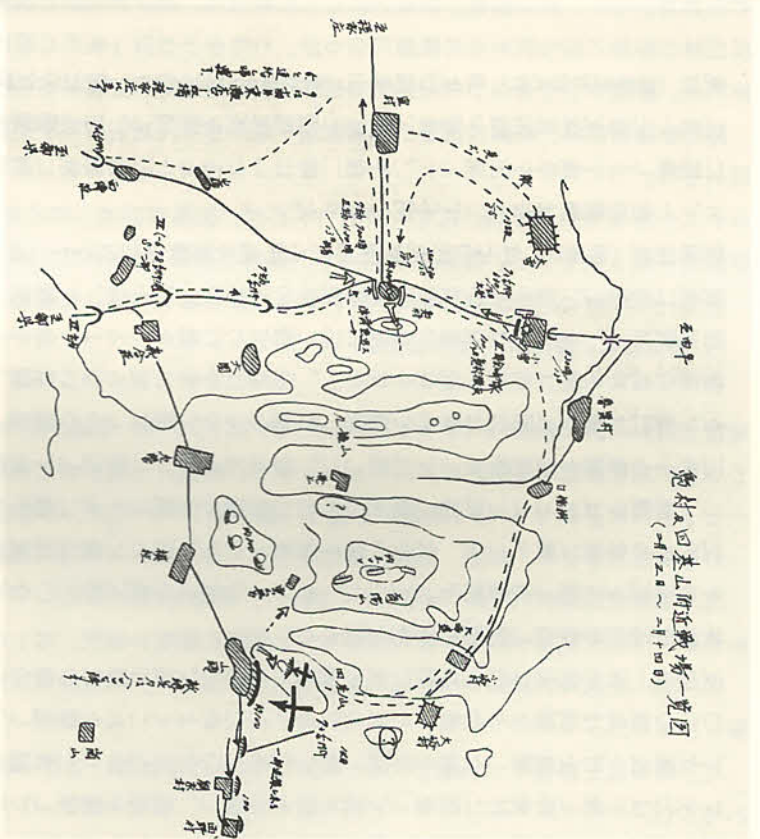


図4-8 鬼村の戦闘図

ク一台に同乗した。午後三時三〇分、鬼村村内で偵察、捜索中に襲撃され、軽機関銃分隊の数人は死傷したが、歩兵隊(斥候)十数人は北門を占拠し敵約五〇〇名を相手に善戦した。四時間陣地を守りぬき、午後七時頃、救援隊の第七中隊の主力と合流した。さらに夜半、第二大隊の主力も現場に到達し、ここで日本軍は主力をもって鬼村周辺の村に徹夜復掃蕩を行った。『曲阜大事記』にある家千軒に放火、住民三人を惨殺の記録は、この報復掃蕩のことであろう。もちろん日本軍側の戦闘記録には、こうした殺人、放火を記録しない。

鬼村の戦いに関して、翌日四基山(鬼村東一〇キロ、孟子陵がある山)の攻防(第七中隊対約八〇の敵)に合わせた第六三聯隊全体の死傷数は「准士官以下戦死三名負傷八名であった」。中国側が記録した「二五名の死亡」と大差がある。

この鬼村の戦いは、四川軍襲撃部隊の主力を牽制し、田嶋隊を包囲する敵の攻撃力を弱めたと、戦闘記録が分析した。

以上の二つの記録を合わせると、小雪、鬼村の戦いで待ち伏せを受けた日本軍は、曲阜、郷県両方向を合わせて四五十五〇名で、トータルな被害は死亡二一名、負傷一六名になる。

- ③歩兵第六三聯隊第一大隊第二中隊陣中日誌の記録
- 次にもう一つ関連の史料である、歩兵第六三聯隊第一大隊第二中隊の「陣中日誌」の記録をみよう。
- 同中隊は旅団司令部を警護する中隊で、所属の第一大隊とともに聯隊本部から離れて曲阜に駐在した。二月三日現在員数二七九名であり、なおこの日は雨天の記録であった。
- 午後三時二五分、曲阜東南門で、第一大隊長沖田一夫中佐から緊急命令「沖作命号外」が出された。
- (一) 敵ノ兵力明ナラス
- (二) 旅団長閣下一行苦戦中ナリ



(三) 大隊ハ先ツ小雪二向ト急進セントス〔後略〕<sup>(22)</sup>

この命で、二個中隊約四〇〇名の部隊が緊急動員され、第一中隊、機関銃中隊、第二中隊はトラックに乗車して出発し、大隊砲と馬匹は歩行で追及した。

午後四時二〇分の作戦命令では、第一中隊が「右第一線本道以西ノ地区ヨリ小雪ヲ包圍スル如ク攻撃シ旅団長閣下一行ヲ救出シ爾後小雪西部地区を掃蕩スヘシ」、第二中隊は「左第一線本道以東ノ地区ヨリ小雪ヲ攻撃シ旅団長閣下一行ヲ救出シ爾後小雪東部ヲ掃蕩スヘシ」というさき撃ちの救出、掃蕩計画であった。<sup>(23)</sup>

午後七時三分の「曲阜露営司令官」の第五号命令に戦闘結果が報告され、「自動車ヲ射撃セシ敵兵力ハ約五〇ニシテ我カ掃蕩隊ニヨリ撃退シ掃蕩隊ハ午後六時二〇分曲阜ニ帰還セリ」であった。

午後九時二〇分の「沖作命第三百十号」にさらに具体的なな情報が伝えられ、「正午出発曲阜二向ハレタル旅団長閣下ハ途中小雪部落ニ於テ敵匪ト遭遇激戦中ナルノ状況ヲ知り軽装ニテ直ニ南門外ニ集合自動車ニ依リ小雪二向ト午後四時二〇分到着直ニ命令ニ基キ之カ攻撃撃退セリ、……閣下ハ負傷セラレアリタルモ軽傷ト聞ク」であった。<sup>(24)</sup>

この史料は、救援に向かう曲阜の守備隊の動きを記録したものである。田嶋支隊長が襲撃された報を受けたのは、午後の二時過ぎであり、部隊は三時五分出動命令が出され、四時二〇分小雪村に到着し、六時二〇分掃蕩を完了して戻ってきた。前記第六三聯隊の曲阜部隊が鬼村の救援を行う際、午後七時小雪村の現場も搜索し敵情を窺見できなかつたと記録しているが、曲阜側の部隊は掃蕩任務を完了して引き揚げた後だったのでたのだらう。

また、襲撃時の敵は当初二〇〇名と報告されたが、救援隊が記した敵情報には約五〇名しかなく、すなわち、救援隊が到達した際、四川軍の大部分はすでに戦場から撤収され、現場に残したのは旅団長が入った民家を包囲し続けただ一部のみだったと思われる。

## ① 登東洋夫中尉の記憶

一番臨場感に溢れる記録は、『毎日新聞』の従軍記者寺島特派員が事件の翌日に書いた報道記事と、田嶋旅団長の警護責任者である通信班長登東洋夫中尉(当時)の記憶である。この両方は『田嶋栄次郎追悼録』に載っている

ので、以下に続けて録しておく。

## 旅団長の負傷

忘れもしない昭和三年二月三日、旅団長は濰陣月余に及ぶ第一線聯隊の激励視察に行かれることになり、来栖次級副官と私がお供を命ぜられました。前線との距離は四里(二六耗)、平素は単騎伝令が往來しても危険のない安全地帯であったが、護衛隊長役の私は念のため松江歩兵第六三聯隊の半々小隊を出して貰い、これをトラックに乗せ、閣下の乗用車(今井秀雄上等兵運転)に、来栖少佐、登中尉、それに宿舎の孫息子八才の尤祥少年(後述)の三名が同乗、前線に向かいました。曲阜南方約八耗の小雪部落で突如敵と遭遇閣下が負傷されるといふ最悪事態が起きたのですが、……詳しい状況は、天津以來わが軍に従軍記者として行を共にしていた毎日新聞の寺島特派員の翌一四日発信の記事の新聞切り抜きが私の手元にありますので、これを引用したいと思います。<sup>(25)</sup>

登の文により特定できる人数と人名がかなり具体的になってきている。出動した車輛は、乗用車一台とトラック一台、乗用車に、田嶋司令官、来栖次級副官、登中尉、運転手今井秀雄上等兵、駐屯地宿舎の少年尤祥五人が乗り、トラックに六三聯隊の「半々小隊」が乗車し、目的は前線視察であった。

## ⑤ 寺島特派員の記事

寺島特派員の記事は「田嶋部隊長戦傷の虞、烈々主従美談」というタイトルであった。

(1) 孔子、孟子の生誕聖地と日本軍

2 日本軍の曲阜占領

今日、日本帝国主義の侵略を批判し、抗日の愛国主義教育が盛んに行われていた中国ではあるが、孔子（BC五五一―四七九）、孟子（BC三七二―二八九）の故郷である山東省南西部の曲阜、鄒県に行くど、日本軍が一九三八年一月から現地を占領していた数年間、孔子廟、孟子廟を守ってくれた話をよく聞く。『孔府档案』には、一九三八年二月八日、「代理奉祀官」孔令煜（係系七六代孫）が占領者の田嶋部隊長（駐曲阜歩兵第三旅団長）をはじめ、久保深部隊長（駐曲阜第一〇獨立機關銃大隊長、沖田部隊長（駐曲阜歩兵第六連隊第一大隊長）ら幹部七名を招待した記録があり、時の孔子府の当主で孔子第七七代嫡孫孔徳成（一九二〇―二〇〇八）の伝記にも「日軍尊孔」の見出しで、当時の日本軍による孔子廟、孔子陵などの遺跡保護のことを記録している。

一九三八年一月、津浦線より南下し、曲阜、鄒県一円を最初に占領したのは「台兒庄の戦い」で名を知られた日本北支那方面軍の第一〇師団（師団長磯谷廉介、原隊姫路）の部隊であり、一月から三月中旬、孔子の故郷曲阜、孟子の故郷鄒県に進駐したのは、第一〇師団配下の歩兵第三旅団（田嶋栄次郎少将、原隊岡山）であった。旅団司令部とその警護にあたる歩兵第六三聯隊（松江）第一大隊は曲阜県城に駐留し、聯隊本部とその他の部隊は、孟子の故郷である鄒県に駐留していた。また第一〇師団の歩兵第八旅団（長瀬武平少将、原隊は姫路）は、曲阜に近い済寧に本部を置き、歩兵第三九聯隊（兗州駐在）を率いて、曾子（BC五〇五―四三五）の故郷嘉祥（魯國南武城）、汶上一帯で掃蕩作戦を繰り返した。仁義なき日本侵略軍の掃蕩作戦は、まさに儒教の聖地―孔子、孟子、顔子（顔回）

当事者の記者で翌日に書いた戦地報道なので記事内容は非常に詳細で、死者の数（八名）、出身地とフルネームも記録され、翌日にわざと現場に行き撮った焼け落ちた小屋の写真も付けられていた。この記事で事件の全容はほぼ完全に再現された。

⑥ 事件のまとめとその後

以上に見てきたいくつかの記録は、事件当時の記録資料か、それに基づいて書かれたもので、中国側の口伝記述に比べ、時間、地点、被害状況に関する具体情報（信頼度は非常に高い。記録を総合すると、小雪村伏撃戦は一九三八年二月二三日（日曜日、雨天、陰暦一月一四日）であり、戦闘時間は午後三時三〇分―七時三〇分の約四時間で、出動した部隊は司令部一行五名（聯隊長、副官、通訳、通信班長、運転手、ほかに民間人の少年一人）、護衛部隊は軽機銃一挺を含む兵士約二〇名（二分隊）。また、従軍記者、撮影記者数名もトラックに同乗した。死者は八人であり、負傷は八名で、死者には通訳の中島栄吉と従軍カメラマンの一名が含まれていた。七名は最初の一斉射撃を受けた時の即死たであり、ほか一人は家屋内で抵抗する間の犠牲者であった。田嶋旅団長はこの戦いで軽傷を負い、一〇名弱の部下に守られ、民家二箇所を退守しながら、増援部隊の到来まで四時間をがんばり通した。

田嶋栄治郎は負傷してから、手榴弾で指が吹き飛ばされた登中尉とともに曲阜にある旅団の野戦病院（鉛川軍医少佐以下四名、兵五名）でしばらく入院治療し（図4-11）、<sup>29</sup>まもなく三月一日中将に昇進し、下関要塞の司令官に転出した。翌一九三九年一月、五六歳で予備役に編入されたが、故郷愛知県宝飯郡三谷町で引退生活をしている。一九四二年四月、第二回衆議院議員総選挙（翼賛選挙）の候補者に推薦され、そのまま立候補し（愛知県第五区）衆議院議員に選出された。敗戦後公職追放に遭い、一九五二年に死去した。



図4-11 田嶋少将と登中尉



図4-14 「孟子廟に参詣する日本軍人の心得」

一、孟子は孔子と共に支那人の最も尊崇する偉人なり 而して我等日本人にとりても今日に於ける精神的文化の一大恩人なり

二、されば此處に参詣する者は須らく故國に於ける神社仏閣に参拝すると同様の心得にて慎み深く行動せざるべからず

三、宣撫班の行ふ百の宣伝よりも此處に参詣する諸子の模範的一行が皇軍の本軍人の心得 (図4-14) という史料があり、内容は次のようであった。

曲阜は聖人と称した孔子の廟地で、宏莊な孟子廟は七四代の末裔と称する者が厳修していた。支那軍兵は曲阜軍兵も曲阜県城は取って冒瀆することなく、今次戦場となった他の街地とは趣を異にし、ほとんど常態を残し、住民の逃亡避難などはほとんどなく、商賈は生業を営み一見事変地の様相はなかった。聯隊長は諸隊に指導し、部下に孔子の道統を説き、社会生活における道義の重要性、孔子の主唱した儒教の淵源と日本道徳の関連等につき時宜に応じた教導を行い、行動の余暇孔子廟に参拝させ、孔子ゆかりの故地通過の機会に益々皇道精神の作興に意を注いでいた。

郷県は聖と称した孟子の誕生地で、宏莊な孟子廟は七四代の末裔と称する者が厳修していた。支那軍兵は曲阜軍兵も曲阜県城は取って冒瀆することなく、今次戦場となった他の街地とは趣を異にし、ほとんど常態を残し、住民の逃亡避難などはほとんどなく、商賈は生業を営み一見事変地の様相はなかった。聯隊長は諸隊に指導し、部下に孔子の道統を説き、社会生活における道義の重要性、孔子の主唱した儒教の淵源と日本道徳の関連等につき時宜に応じた教導を行い、行動の余暇孔子廟に参拝させ、孔子ゆかりの故地通過の機会に益々皇道精神の作興に意を注いでいた。

曲阜は聖人と称した孔子の廟地で、…附近の民衆と有識階層には今なお相当濃厚な意識を存し、蔣介石陛下の御名はあつた。曲阜は聖人と称した孔子の廟地で、…附近の民衆と有識階層には今なお相当濃厚な意識を存し、蔣介石陛下の御名はあつた。



図4-13 福栄真平

泰安「泰山麓の県、山の玄関」は大陸に君子の道を提唱した、孔子、孟子が西紀前五〇〇年前後のころ、遊説來往した故地である。しかし現代の大衆には道教観念はすでに頽廢し、ただ物慾のままに日常生活に執心して見るとしか見えない民衆の前に日本軍は道義を本とした行動をもって臨み、謂わゆる皇道宣布の…ため部隊には作戦間軍、風紀の振作が絶え

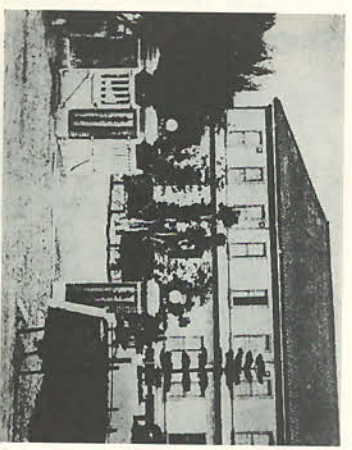


図4-12 当時の旅団指令部

孟子の聖地を守った美談を残した。「歩兵第六三聯隊史」がいう。

を起した部隊で知られるが、曲阜、郷県に駐留している間、地元孔子、の弘暎、滕県の北方の北沙河村で八三名の村民を惨殺した「北沙河惨案」の主役を演じた強悍の部隊で、また南下作戦を開始した二百日の三月一五日六三聯隊はち三月下旬から四月七日にかけての台児庄の戦いで台児庄攻城(大汶口文化の発祥地)に位置し、東に向けて新泰、蒙陰一円を掃蕩した。第主力歩兵第一〇聯隊(原隊岡山、聯隊長赤柴八重蔵)は、この時後方の大汶口二ヶ月以上、孔子、孟子の故郷を駐在、警備した。第三旅団のもう一つの四日「郷県警備隊」と命名され、山東南部剿滅作戦が開始した三月中旬まで、日南下して郷県を支配下に治めた。戦線不拡大の命令を受け同聯隊は一月二日汶河を渡り一路南進し続け、一月四日、曲阜城を急襲攻撃で占領し、五六三聯隊(原隊松江、聯隊長福栄真平大佐) (図4-13) は一月一日泰安を占領、日済南を陥落させ、二〇日南下の追撃作戦に移った。その先鋒となる歩兵第一〇師団の各部隊は一九三七年二月三日黄河渡河作戦を開始、二七曲阜人、B C五二四八二)、曾子の誕生地―で展開されたのである。

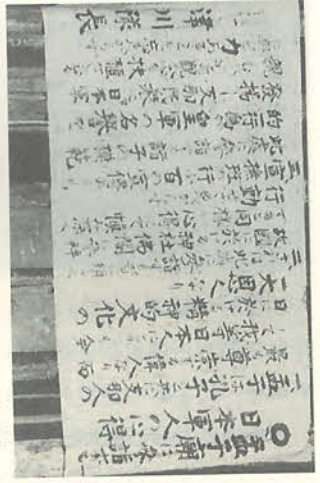


図4-14 「孟子廟に参詣する日本軍人の心得」

一、孟子は孔子と共に支那人の最も尊崇する偉人なり 而して我等日本人にとりても今日に於ける精神的文化の一大恩人なり

二、されば此處に参詣する者は須らく故國に於ける神社仏閣に参拝すると同様の心得にて慎み深く行動せざるべからず

三、宣撫班の行ふ百の宣伝よりも此處に参詣する諸子の模範的一行が皇軍の本軍人の心得 (図4-14) という史料があり、内容は次のようであった。

曲阜は聖人と称した孔子の廟地で、宏莊な孟子廟は七四代の末裔と称する者が厳修していた。支那軍兵は曲阜軍兵も曲阜県城は取って冒瀆することなく、今次戦場となった他の街地とは趣を異にし、ほとんど常態を残し、住民の逃亡避難などはほとんどなく、商賈は生業を営み一見事変地の様相はなかった。聯隊長は諸隊に指導し、部下に孔子の道統を説き、社会生活における道義の重要性、孔子の主唱した儒教の淵源と日本道徳の関連等につき時宜に応じた教導を行い、行動の余暇孔子廟に参拝させ、孔子ゆかりの故地通過の機会に益々皇道精神の作興に意を注いでいた。

郷県は聖聖と称した孟子の誕生地で、宏莊な孟子廟は七四代の末裔と称する者が厳修していた。支那軍兵は曲阜軍兵も曲阜県城は取って冒瀆することなく、今次戦場となった他の街地とは趣を異にし、ほとんど常態を残し、住民の逃亡避難などはほとんどなく、商賈は生業を営み一見事変地の様相はなかった。聯隊長は諸隊に指導し、部下に孔子の道統を説き、社会生活における道義の重要性、孔子の主唱した儒教の淵源と日本道徳の関連等につき時宜に応じた教導を行い、行動の余暇孔子廟に参拝させ、孔子ゆかりの故地通過の機会に益々皇道精神の作興に意を注いでいた。

曲阜は聖人と称した孔子の廟地で、…附近の民衆と有識階層には今なお相当濃厚な意識を存し、蔣介石麾下の軍兵も曲阜県城は取って冒瀆することなく、今次戦場となった他の街地とは趣を異にし、ほとんど常態を残し、住民の逃亡避難などはほとんどなく、商賈は生業を営み一見事変地の様相はなかった。聯隊長は諸隊に指導し、部下に孔子の道統を説き、社会生活における道義の重要性、孔子の主唱した儒教の淵源と日本道徳の関連等につき時宜に応じた教導を行い、行動の余暇孔子廟に参拝させ、孔子ゆかりの故地通過の機会に益々皇道精神の作興に意を注いでいた。



図4-13 福栄真平

泰安「泰山麓の県、山の玄関」は大陸に君子の道を提唱した、孔子、孟子が西紀前五〇〇年前後のころ、遊説来往した故地である。しかし現代の大衆には道教観念はすでに頽廃し、ただ物慾のままに日常生活に執心しているとしか見えない民衆の前に日本軍は道義を本とした行動をもって臨み、謂わゆる皇道宣布の…ため部隊には作戦間軍、風紀の振作が絶え

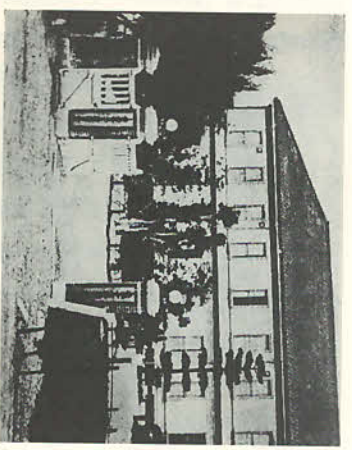


図4-12 当時の旅団指令部

孟子の聖地を守った美談を残した。「歩兵第六三聯隊史」がいう。

を起した部隊で知られるが、曲阜、郷県に駐留している間、地元孔子、の弘暎、滕県の北方の北沙河村で八三名の村民を惨殺した「北沙河惨案」六三聯隊はち三月下旬から四月七日にかけての台児庄の戦いで台児庄攻城の主役を演じた強悍の部隊で、また南下作戦を開始した二百日の三月一五日(大汶口文化の発祥地)に位置し、東に向けて新泰、蒙陰一円を掃蕩した。第主力歩兵第一〇聯隊(原隊岡山、聯隊長赤柴八重蔵)は、この時後方の大汶口二ヶ月以上、孔子、孟子の故郷を駐在、警備した。第三旅団のもう一つの四日「郷県警備隊」と命名され、山東南部剿滅作戦が開始した三月中旬まで、日南下して郷県を支配下に治めた。戦線不拡大の命令を受け同聯隊は一月二日汶河を渡り一路南進し続け、一月四日、曲阜城を急襲攻撃で占領し、五六三聯隊(原隊松江、聯隊長福栄真平大佐) (図4-13) は一月一日泰安を占領、日済南を陥落させ、二〇日南下の追撃作戦に移った。その先鋒となる歩兵第一〇師団の各部隊は一九三七年二月三日黄河渡河作戦を開始、二七曲阜人、B C五二四八二)、曾子の誕生地―で展開されたのである。



図4-15 孟繁驥一家

当時、階級の低い日本軍人は孔子府の応接間にしか上がれず、内府の

名譽を發揚し支那民衆に日本軍親むべきとの觀念を扶植せしむるに於て力あることを忘るべからず  
内容、日本軍人のための参拝の心得であり、軍紀を糺すための注意書きであるが、同時に模範な支配を施し  
「皇道宣布」という宣傳工作の目的もあつたと思われる。頒布者の「津川隊長」は、郷貫駐在歩兵第六三聯隊第八  
中隊長、津川盛雄大尉のことであり、この時中隊は孟子廟の警備を担当していた。この看板は、前述のとおり、福  
栄聯隊長の教育、「指達」に従つて掲げたものである。  
孔徳成の実姉孔徳懋（一九一七）の回顧によると、「日本軍は曲阜に進駐するや、孔子府の二堂（内堂）の金箱  
看板に聖人末裔の住宅を尊重、保護し、日本の軍人立ち入り禁止という大きな布告掲げた。軍人たちはこの布告  
を見ると、一札をしておとなく引き上げてゆく。  
また、「日本軍は曲阜を占領している時、……孔子府、孔子廟など歴史の旧跡を保護し、孔子を尊敬した。将校  
はよく孔子廟に参拝してお香を上げ、お礼の後金銭を寄付する。受付のものは日本軍将校の名前と寄付の金額を看  
板に書き出したところ、後来の参拝者は、その金額を負けに寄付金を弾むようになる。月末になると看板に記名  
が滿杯し、……この収入は孔子府の日常支出にいくばくか役立つた」。

### (2) 孔子、孟子の末裔との交流

この時、郷県の孟子府には、孟子の第七三代嫡孫、六二歳の孟慶棠（一八七七一―一九四四）一家が住んでおり、写  
真（図4-15）に写つた若い親子三人は、その子で七四代孫の孟繁驥（一九〇七―一九九〇）一家であつた。孟慶棠  
は一八九四年、祭祀を司る世襲職「翰林院五經博士」を継承し、一九三五年、上記職の停止とともに、国民政府か  
ら「亜聖奉祀官」の世襲職が与えられていた。  
一方、孔子家の当主、曲阜の孔子府に住む孔子の第七七代嫡孫孔徳成（一八八七）は、日本軍の曲阜占領直前の一  
月二日深夜、蔣介石の命令で、山東軍の第二師師長孫桐萱によつて武漢に連れだされており、孔子府の行政と祭  
礼（代理奉祀官）を臨時に委嘱されたのは、孔徳成の族叔孔令燧であつた。  
孔令燧（一八七七一―一九五五、孔子第七六代傍系孫）は第七三代衍聖公孔慶鏞の胞弟孔慶樂の後代で、分家の中一  
番血縁が近く、孔子府の東院に住んでいた。年長者で、人望があり、山東省財政庁の科長を務めた経験があつた。こ  
の間、曲阜の孔子府に孔令燧、郷県の孟子府に孟慶棠という二人の年長者が日本軍との折衝の失面に立たされ、史  
跡、建築、家宝、住民などを守るため、秩序維持の協力および社交、文化交流の応酬などで日本軍の敏心を買い、  
恭順を示した。漢民族の気節が祖宗の名譽、文化遺産かの狭間で二人はさまよい、かなり苦勞したようであるが、  
幸い、日本軍も儒教道徳の宣揚、聖地保護の政策をとつており、曲阜と郷県に限つては、他の占領地と一風変わつ  
た平和な支配風景を呈した。  
また、二人とも能筆者で教養も深い人物なので、日本占領下の七年間、聖人廟堂の参拜、末裔への表敬訪問、ま  
た書を求めに来る日本人は、軍人、民間人を問わず跡を絶たなかつた、という。

なお、孔徳懋の回顧によると、この間孔子府の接客責任者は「孔連勳」といふ交際に長じた人物が担当し「陸軍  
墓地慰霊祭、新民会の準備、大日本宣撫班講演会……等について、彼がいつも孔子府を代表して応酬した」。  
孔府はこうして危険な占領地のなかで特權を持つ安全地帯になり、孔令燧も「城内の老若男女を孔子廟と孔子府に  
匿つたことで、地元の人々にも尊敬されていた」。

一方、日本軍と孔子、孟子末裔の間の関係は決して支配者と被支配者  
の強圧的關係ではなく、むしろ文化の壁の前で逆転した奇觀を呈する。  
孟繁驥一家  
当時、孔子府に住んでいた孔令燧の子息孔徳璠（一九二七―）は次のよ  
うにいう。

入り口にある「立入禁止」の赤紙を見ると、おとなしく入り口の前で足を止めた。階級上の将校たちにお茶を出すため、忠恕堂に上がつてもらうが、いつも礼儀正しく手土産を忘れず、長く邪魔したこともなかった。持参した半紙で書をねだり、写真をとったり、賽銭を挙げ早々と引き上げていく。……私も日本軍の少将を接待したことがあるが、彼はわざと下座を選び、随伴の高級将校は彼のそばに座るが、その他の下士官を屋外に立たせた。<sup>④</sup>

この時期の孔徳壇はまだ一〇代はじめの少年であった。この礼儀正しい「少将」は、田嶋栄次郎が済寧より参拜してきた長瀬武平（第八旅团长）のことであろう。

儒学は日本の漢学の中心学問として古くから歴代の支配者によって尊崇されただけでなく、近代以来、日本道徳（教育勅語）の一部にも組み込まれ、忠君愛国の思想教育に利用されてきた。また明治に生まれた田嶋栄次郎、福栄真平らのエリート指揮官も、いずれも小さい時から漢学の薫陶を受けており、その親近感からも自然に孔子、孟子の誕生聖地の保護政策をとるに至つたと思われる。

また現地将校たちの尊敬、畏敬だけでなく、上からの指示もあつたようだ。前述孔徳成の伝記によると、山東作戦を行う前から東京帝大教授高田景治（一八九三—一九七五、支那学）は、軍部に対して「もし山東作戦が曲阜の遺跡にダメージを与えたら、日本は世界文化遺産破壊の責任を負わなければならない」と進言し、そのため軍の通達を受けた前線部隊は曲阜に入るや布告を張り出し、遺跡の保護を表明した、という。<sup>⑤</sup>

近代以来、「文化事業」を通じて対華戦略を展開するのは、日本政府外務省の一貫した政策であり、また、日本の儒学者、教育者による中国の儒者や、曲阜、鄒県にいる孔、孟の末裔との交流や、曲阜遺跡の保護活動は日中戦争前からはじめていた。一九三五年四月東京湯島聖堂（日本の孔子廟）の震災後復興工事が完了した際、記念事業の一つとして民間組織斯文会を中心に「聖堂復興記念儒道大会」が企画されていたが（四月二八日—五月一日）、斯文会の働きかけで日本政府外務省からも「満洲及び支那ニ於テ孔子廟復興」を宗旨とする「文化事業」の各目、助成金一万円が交付された。この事業は、事業内容のなか、中国の曲阜、鄒県から孔子、孟子の末裔を招待する計

画も含まれ、日本側が孔子嫡孫の孔徳成、孟子嫡孫の孟慶棠、顔子の嫡孫顔世鏞の来日を希望したが、さすがに日本による傀儡権満洲国を含む「日滿支三国民間同種同文ノ親善」を掲げる会の主旨は警戒され、リストに上がった嫡系の末裔たちはひとりも来なかつた。結局代表となつて来日したのは、孔子傍系の末裔、曲阜中学校長孔昭潤、顔子の傍系采裔、曲阜県財政部長顔振鴻二人だけである。一方、孔徳成は祝賀の意を表すため、孔子家を代表して如意、祝辞と「綏来動和」の書を寄贈し、漢学者羅振玉も商代の青銅器五点を寄付した。なお、「儒道大会開催に至る経過概要」によると、この会は「昭和六、七年の交、財団法人斯文会副会長阪谷芳郎男爵は深く時勢に鑑み、東亜諸国共有の儒学思想を中心に「同文同種なる東亜民族を結合」という発案に基づくもので、満洲国成立後の「五族協和」（日本・漢・朝鮮・満洲・蒙土）の建国理念に沿う政治的意図も明確であつた。大会には、他に日本政府の息がかつた、孔子家代表、中華民国政府要人、満洲国代表、朝鮮代表、台湾代表、台湾代表、儒教界の代表者四六人が日本に招かれ、日本の満洲侵略を背景にしたこの所謂「文化事業」に、政府外務省の儒教による「五族協和」



図4-16 孔徳成が寄贈した書

の満洲国建国理念を中国全体に広げていく政治的意図が窺えよう。またこの会の機会を借り、中国側の康有为等の発起、日本側の市村瓚次郎（国学院大学学長）らの協力で、曲阜孔子廟のため修繕基金の活動も行われた。<sup>⑥</sup>

こうした戦争前からの「儒教道徳」の顕彰による「五族協和」という、政府文化事業と民間文化交流の影響下において、日中戦争後、山東省南部に侵入してきた第一〇師団部隊も、蒙陰、新泰、汶上、济宁、曲阜、鄒県の

一線で非道な占領、武力掃蕩作戦を行う反面、孔子、孟

子

の故郷曲阜と鄒県において「仁義」を講じ、軍紀を引

き締め、史跡の警備、保護に努めた。兵士のための「参

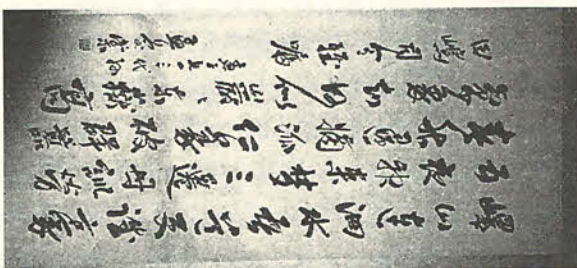
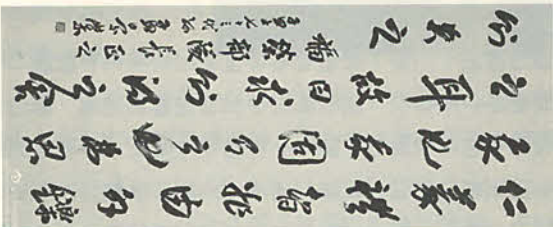
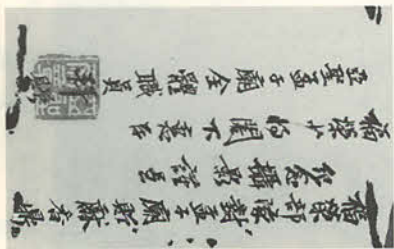


図4-20 福栄真平に贈られた孟慶棠の書

図4-19 田嶋栄次郎に贈られた孟慶棠の書

拝の心得」も布告するように、兵士たちに参拝を促し、また組織的な集団参拝も行われた。曲阜、鄒県の駐在部隊だけではなく、近く兗州（曲阜西二〇キロ）、済寧（南西五〇キロ）に駐在する長瀬支隊（第八旅団）の将校も、曲阜に出向き、孔子廟を参拝した。また、廟宇の保護、参拝だけではなく、孔子、孟子府の関係者とも交流し、表敬、観光、記念写真撮影のため、たびたび孔子、孟子府を訪れた。この時、前記孔令楨の話にあるように、いつも手土産と半紙を持参し、孔令楨（至聖奉祀官代理）、孟慶棠（理學奉祀官）などに書をねだった。

田嶋栄次郎が曲阜、鄒県から持ち帰り、後代が珍藏した孟慶棠に送られた書（図4-19）は次のような内容であった。

驛山連泗水 吾道更誠豪  
五夜神來夢 三遷母訓勞  
春秋歸嫡派 仁義做群喜  
氣象如何似 巖巖東嶽高

田嶋司令雅囑 孟子七十三代孫 孟慶棠

この詩は、婉曲ではあるが、吾道（孟子）の「仁義」をもって、日本軍の行為（群喜）を暗に批判し、歴史（春秋）を主導するのは結局嫡派（孔子、孟子）と中国（東嶽・泰山）であると暗示した。



図4-18 長瀬武平少将の孔子廟参拝



図4-17 歩兵第63聯隊の孔子廟参拝

日本人と付き合う「漢奸」といわれる人物であるが、孟慶棠の抵抗ぶりを示す立派な文書である。「漢字精通」の田嶋は果たしてこの詩の寓意を理解していただろうか。

田嶋栄治郎の子孫によると、この時田嶋が手に入れたものには、孔子の末裔のものもある。田嶋が帰国後、この二枚の書を二枚折の屏風に表装していたが、本人他界のあと、子息兄弟はそれを分け、それぞれ再表装した、という。孔子の末裔の書は未見だが、孔令楨の書であるに違いない。孔令楨は占領下日本の代表者として、応酬、周旋のため、多くの日本人に書を贈った。

一方、福栄真平聯隊長は鄒県に駐在しており、元の孟子府の孟慶棠からも、図4-20の書を贈られた。贈り状を見ると、この書は福栄部隊による香鼎贈呈の御礼として、贈呈式の記念写真とともに、孟子廟職員全体に贈られたものであることがわかる。

仁義礼智 非由外鑠我也 我固有之也 弗思之 耳 故曰求則得之捨則失之

福栄部隊隊長正之



図4-21 登中尉と尤祥少年<sup>(57)</sup>

であった。ところが、十数年前の夏、夜の一時頃突然の電話のベル、今ごろ何事と、あわたたしく愛話器をとる。ただし口で私の現れるのを今や運しと待っていた。立派に成人していたのは当然のことだが、幼な顔はそのまま残っていた。二人はひと抱き合った。彼が異国の人という意識は私にはなかった。生き別れの弟にやっと会えたという思いであった。行方不明後たどった少年の運命、中国の動乱で肉親とも別れわかれになり、大陸を脱出して兄と二人で台湾に逃れ、今は幸せに暮らしているという。少年との一別以来、気になっていたことが、思わぬ再会で、霧がきれいに晴れていった。

前節の田嶋遭難事件の時、乗用車に同乗した少年尤祥の話である。戦後の平和時代になってこそ、価値が増す話であるが、敵国として戦争しているにもかかわらず、一ヶ月あまりの駐在で結ばれた二人の友情と記憶は忘れず戦火を乗り越えて続いた。登の話によると、尤の祖父は「元知事」であり、前記孔令煜の二月八日の招宴案内にも七人の日本軍指揮官（部隊長）のほかに、二人の中国人の名前があった。「尤濶岑」と「呉濶山」である。この「尤濶岑」という人物は、元県知事で尤祥の祖父であろう。曲阜の田嶋部隊の司令部は、尤家の前庭を借りており、尤祥はその主の孫息子であった。二月三日、「見物」とせがまれ田嶋の乗用車に載せていたが、伏撃に遭い、少年はその後姿を消した。少年を車に載せたことに、登中尉はその後長い間良心の呵責を感じたであろう。負傷後まもなく内地に後送されたため、彼は尤祥少年の安否を知る由はなかった。前節にある四川軍の排長

先述した田嶋旅団司令部の通信班班長登東洋夫中尉の回想にも、以下の美談が載っていた。

(3) 登中尉と尤祥少年の友情

私は昭和二年一月始めから同年三月末まで負傷して内地送還に至るまでの約三ヶ月間を、孔子廟の所在する聖地曲阜で過ごした。駐屯地司令官は田嶋旅団長、私は旅団通信班班長のほか住民対策も担当していた。私の住民対策の基本的な方針は、閣下から命ぜられた「中国の民衆に罪はない、従って彼らの生活を安全に保護する」とともに、中国民衆の信仰の対象である孔子廟の保護に万全を尽くせ」との閣下のお考えを忠実に実行することであった。私たちの司令部は孔子廟に程近い元県知事の大きな邸宅を東側の半分借り上げ使用、中庭を囲んで廻り廊下で連がる西側の半分に老夫妻、その子夫婦と孫息子二人に使用人たちが住んでおり、私たちとは実に仲良く交際していた。一番下の孫息子を尤祥（エーション）といい、頭のよい可愛い八才の少年であった。私は少年に中国語を習い、日本語を教えた。彼は「哥哥、ニコニコ（兄さん）」と私になっていた。

旅団長が前線視察するという。私はトラックに半小隊の護衛兵を乗せ、乗用車に旅団長、次級副官と私、それにどうしてもせがんで同行する少年とが乗り、約四里（二六軒）南方の第一線へ向けて出発。約半分行程の小雪部落で突如敵に遭遇、完全に包囲された。その時の戦斗で私は重傷を負い、少年は一時行方不明になった。祖父母、父母の嘆き悲しみはいままでもなく、野戦病院のベッドに呻吟する私の心は千々に乱れた。そして私は内地送還、以来少年とは会うこともなく、唯引き続く戦乱、内乱の大陸での彼とその家族の安否を案ずるばかりで

書の内容は、孟子『吾子上』中の一句である。これも「仁義礼智」の修養を求める書であり、征服者の日本軍に対して、婉曲な啓示、教誨メッセージも潜められているように思える。





図4-21 15歳時の孔徳成

昭和三年の秋頃と思うが、旧知の毎日新聞の記者から当時役所勤めをしていた私のところへ電話があった。彼いわく「台湾から孔徳成台湾大学教授が来日しており、あなたの所在を探している。ぜひ会いたいとの事です」と。用件はおそらく孔子廟に関連していることだろうと思ひ、田嶋將軍はすでに故人となっておられたので、未亡人をご案内して、麻布の藤ホテルに孔教授を訪れた。教授は大変下



図4-23 孔徳成と田嶋未亡人

(4) 孔徳成と田嶋未亡人の対面  
同じように、蒋介石に連れだされ武漢に避難した孔子の七代嫡孫、一八歳の孔徳成も、故郷を追われた恨みを念じつつ、武漢に至るや「抗日声明」を発表するが、日本の敗戦後一九四七年、一〇年ぶりに曲阜に舞い戻った時、孔子廟も、陵墓も傷つけずに保護された様子を見て感激した。これをきっかけに逆に日本軍の尊孔政策に感謝するようになった。叔父の孔令燧をはじめ、地元の話から田嶋栄次郎部隊長の保護政策と活動を知り、また宣伝(官撫工作)担当の登中尉の話も耳にした。孔徳成はもちろんで田嶋とは面識はなかったが、一九五七年一〇月、日本道徳科学研究所と廣池学園の招請で初来日した際、礼を言うべく田嶋栄次郎元旅団長と登元中尉を探し尋ねた。田嶋はすでに五年前に他界し、登の案内で、一〇月三〇日夜、都内の藤ホテルで田嶋未亡人との対面を実現した(図4-23)。この対面について、登東洋夫はつぎのように綴った。



図4-22 来日時の尤祥

潘近仁老人もこの話を記憶しており、少年「游倫」を「特別捕虜」としてしばらく四川軍の司令部に保護していたが、その後自宅に返した、という。尤祥は戦後、登東洋夫と東京で再会を果たした後も、文通関係を保ち続け、田嶋栄治郎の伝記が一九九〇年刊行する前、登の要請で次のようなメッセージを寄せていた。

尤祥少年は一九三八年当時八歳であれば、この手紙をよこした年は遼歴であらう。国家対立の歴史を乗り越えた人間ドラマのコマである。

私は代々山東省の曲阜県に住んでおり、孔子の故郷として、中国数千年の伝統文化を保持し、文化水準も高く、民も純朴であった。中華民國二十六年(昭和十二年)日中戦争が勃発、日本軍は曲阜に進駐、登東洋夫中尉は私の家の東の建物を司令官田嶋先生の駐在地とした。私はまだ少年であったが、相い識るに及んで常に夕食に招かれ、初めて日本料理を食べ、新鮮な感じを持ったこと覚えている。  
田嶋先生は漢学に精通し、書法に長じ、温和な儒者の風格があり、儒將の風を備えておられた。これは私に深い印象となっている。私は民國三十八年(昭和二十四年)台湾に渡り、四十六年(昭和三十三年)田嶋先生の訃報を聞いたが、惋惜に耐えず、頭をめぐらせ、うたた隔世の感を禁じえない。ここに登東洋夫先生の手紙で田嶋先生の子息がその伝記を刊行されようとするのを知り、その間の経緯を簡単に誌した。往事歴史、欲泣耐えず、哀心の感ここに至るを感じる。

中華民國七十九年四月

尤瑞周(祥) ⑨

心もある善良の本性を持ち、文化も同じように國境なしに伝播、享受する普遍性がある。こうした側面を人間的軍国主義の「國民」「皇軍」として戦場に駆り立て、殺人鬼に化した責任は、決して個人、あるいは「民族性」ではなく、「靖國」「愛國」と称した国家の行為にあることを、認識しなければならぬ。戦争で大事な肉親をなくしたご遺族の方にも、この点を気づいて欲しいものである。

註

- (1) 「旅团长陸軍少将瀬谷啓」(歩兵第六十三聯隊史 同編纂委員会 非売品、一九七四年) 巻頭写真。
- (2) 伊藤正徳「軍閥と史」三(文藝春秋新社、一九五八年)七八頁。なお、瀬谷の問責に関する論争は、拙論「日軍的戦中資料和台居庄論争」(岡山山文学部紀要 二〇一五年七月)を参照。
- (3) 秦郁彦編「日本陸海軍総合事典」(東京大学出版会、二〇〇五年) 八一頁。
- (4) 「旅团长陸軍少将田嶋栄次郎」(歩兵第六十三聯隊史 同編纂委員会) 巻頭写真。
- (5) 田嶋茂編「田嶋栄次郎追悼録」(私家版、一九九〇年) 一〇〇頁。
- (6) 黄河渡河のための便衣偵察。右より榎栄真平、田嶋栄次郎、赤柴八重蔵、大阪朝日新聞社、一九三七年一月三〇日。朝日新聞歴史写真アーカイブ。
- (7) 田嶋茂編「田嶋栄次郎追悼録」一〇七頁。
- (8) 「第十五師団歩兵団長同副官漢口ヨリノ帰途消息不明ノ件」(アジヤ歴史資料センター) REF0412123600。
- (9) 山東省政協文史資料委員会編「悲壯之役・記一九三八年滕県抗日保衛戦」(山東人民出版社、一九九二年) 七七頁。
- (10) 山東省曲阜市地方史志編纂委員会編「曲阜市志」(齊魯出版社、一九九三年) 大事年表。
- (11) 高洪富「小雪、鬼村伏撃日軍紀実」(済寧市政協文史資料委員会「済寧歴史文化叢書」山東友誼出版社、一九九八年) 二六六頁。
- (12) 韓信夫「響兵台居庄」(重慶出版社、二〇〇八年) 第三章「台居庄序戦之滕県保衛戦」を参照。
- (13) 楊紀「戦時西南」(百新書店、一九四六年) 二二頁。

おわりに

この年、孔徳成は三七歳、その後さらに三年の歳月が経った一九九〇年、田嶋栄次郎の伝記が刊行される際、七〇歳になった孔徳成も次のメッセージを寄越した。

中華民国二十七年、日中戦争の間、日本駐中国山東省曲阜司令官田嶋栄次郎先生は交戦国の將軍として、中国儒家思想発祥の地——孔子の故郷の孔林、孔廟、孔府の擁護に尽力されました。民国四十六年(昭和三十三年)私か日本を訪問したとき、田嶋先生との面晤を期しましたが、すでに世を去っておられ、その夫人と会うことができませんでした。半世紀前の田嶋先生のなされたことについて私は今も感謝しております。ここに先生の後人がその伝記を刊行されるに当たり、謹んで教語を綴り、心からの感慨の念を申し述べます。

重に私たちを遇され、孔子廟の保全に尽くされた故田嶋將軍の徳をたたえ、心から謝意を表された。孔子七七代曲阜に帰られたとのこと。氏のお話によると、帰郷にあたり最も心配したのは孔廟が損傷を受けているのではなか、ということであったが、昔のまま完全に保護されており、これが最も嬉しかった。住民たちの話をいろいろ聞いたが、それというのも田嶋將軍の敬命で、全部隊員が廟を守ってくれたし、住民に対しても非常に親切だった。そして住民から感謝されていたらしく、私の名も耳にしていて、訪日したらぜひお会いしてお礼を申し上げたいと思っていたとのことである〔後略〕。

- (14) 『世界軍事』二〇一三年七月、上、第五〇一五三頁。
- (15) 『劇劇有戯』四川軍警驍日將之謎 新疆電視台(総括監督趙玉琦)二〇一二年五月二十五日放送による。
- (16) 同右。
- (17) この時は軍靴に相手をつけていないようである。田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』一四四頁。
- (18) 『将校同担当准士官用靴留革拍車及脚絆制式中改正の件』R&C20398300、添付図面を参照。
- (19) 昭和九年軍用地図(二〇万分の一)(荏州、參謀本部製、岐阜県図書館)。
- (20) 『歩兵第十聯隊史』(同刊行会、一九七四年)四九九一五〇〇頁。
- (21) 『歩兵第六十三聯隊史』(同編纂委員会、一九七四年)三一九一三〇頁、( )内は軍隊符号に対する筆者の注釈である。
- (22) 『陣中日誌 歩兵第六十三聯隊第二中隊』J&C20 R(アジア歴史資料センター) R&C1111256900 № 668
- (23) 同右『陣中日誌 歩兵第六十三聯隊第二中隊』R&C1111256900 № 670
- (24) 同右『陣中日誌 歩兵第六十三聯隊第二中隊』R&C1111256900 № 674 № 676
- (25) 田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』一四八頁。
- (26) 同右、一〇四頁。
- (27) 同右、一五〇頁。
- (28) 同右、一四八一二五二頁。
- (29) 同右、一五三頁。
- (30) 同右、一五二頁。
- (31) 『曲阜論後代理代理奉祀官孔令煜取悦日寇激愛知單』『孔府檔案』八九一四(曲阜、孔子府檔案館)。
- (32) 劉岳兵『論日本近代的軍國主義与儒学』(中国社会科学院研究生院学报 二〇〇〇年第三期)。
- (33) 『第十七師团本部(一九一四年以降第三旅团本部)』(同編纂委員会『歩兵第五十四聯隊史』非売品、一九八九年)一頁。
- (34) 『歩兵第六十三聯隊史』(同編纂委員会、一九七四年)巻頭写真より。
- (35) 同右、一三三頁。
- (36) 『藤原作戦における日本軍の虐殺記録—日本軍資料の盲点をつく』(年報日本現代史 第二〇号、二〇一五年五月) 参照。
- (37) 『歩兵第六十三聯隊史』三〇八頁、三二四一三五頁。
- (38) 同右、三二五頁。
- (39) 『郷兵警備隊戦闘参加将校人名表』(『歩兵第六十三聯隊史』三二六頁。
- (40) 孔德懋『孔府内宅軼事』(天津人民出版社、一九八二年)二頁、二五頁。
- (41) 一九三九年(民国二八)孟慶霖の跡継ぎで重理奉祀官に就任し、一九四九年中華人民共和国成立後、台湾に渡っている。この写真は『姫路歩兵第三十九聯隊史』(三六九頁)にあるもので、当時の兵士が撮影したと思われる。
- (42) 汪士淳『儒者行 孔德成先生傳』(聯經出版事業(股)公司、二〇三年)一一五頁。
- (43) 孔德懋『孔府内宅軼事』一一五頁。
- (44) 汪士淳『儒者行 孔德成先生傳』二七頁。
- (45) 同右、一一五頁。
- (46) 同右、一一五頁。
- (47) 孔德成は日本人との交渉を避けるため病を称して謝絶した、という(同右、一一五頁)。
- (48) 斯文会編『湯島聖堂復興記念備道大会』(非売品、一九三六年)巻頭写真。なお『綴来動相』の語は、論語中の「夫子之得邦家者、所謂立之斯立、道之斯行、綏之斯来、動之斯和」から、孔子の仁義道徳を以て天下を治める意味、日本の満州支配に対する一種の文化的抵抗ともいへき内容である。
- (49) 同右、一頁。
- (50) 『聖堂復興記念備道大会開催二助成二開スル件』昭和一〇年四月 J&C20 R(アジア歴史資料センター) R&C1111256900
- (51) 『山东省曲阜聖堂重修関係』R&C1111256900
- (52) 『孔子廟へ参拝する聯隊特兵』(『歩兵第六十三聯隊史』三二三頁。

- (53) 「日軍団歩兵攻占山東曲阜」北京、中国人民抗日戦争記念館蔵。
- (54) 田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』私家版、一〇五頁。
- (55) 「孟慶棠書法水墨紙本」株式会社東京中央拍賣、展示品。
- (56) 同右、一五六―一五七頁。図4-22も同書より。
- (57) 田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』一五六頁。
- (58) 「曲阜論陥後代理奉祀官孔令燧取悦日寇激宴知單」『孔府档案』八九二四（曲阜、孔子府档案館）。
- (59) 田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』一六三頁。
- (60) 汪士淳『儒者行 孔徳成先生傳』一六二頁。
- (61) 一九三五年孔徳成一五歳で中華民國政府から「大成至聖先師奉祀官」の世襲職が命じられた時の写真。汪士淳『儒者行 孔徳成先生傳』より引用。
- (62) 田嶋茂編『田嶋栄次郎追悼録』一五八頁。
- (63) 同右、一六二頁。
- (64) 中国では、長年抗日的愛國主義宣伝と抗日の小説、映画、文学作品の氾濫の結果、侵略戦争の責任は国家ではなく日本人の「民族性」（「好戦、残忍、侵略の本性」）にあるという認識は、一般人だけではなく、大学生、知識人にも浸透している。

## 第2章 日本海軍と日中戦争

相澤 淳

はじめに

一九三七（昭和一二）年七月七日に北京郊外の盧溝橋で発生した日中両軍間の発砲事件は、翌八月中旬までに両国の全面的な紛争（日中戦争）へと拡大していった。ところで、日本海軍中央部のこの事件に対する当初の対応は、米内光政（一八〇―一九四八）海軍大臣、山本五十六（一八四―一九四三）次官らのリタミツツの下、紛争の不拡大を強く主張する側にあった。一般に、日中戦争期における海軍の役割については、この当初の米内首脳部の初動における対応のイメージからも、そして、そもそも海軍が陸上ではなく海上で戦うことを本務としたという組織的特性からも、消極的もしくは副次的なものと捉えられることが多い。

しかし、盧溝橋事件発から約一ヶ月後の八月初旬、上海で海軍将兵が殺害された大山事件が発生し中支に事が及ぶと、海軍の態度は一転し、米内海相は紛争の全面拡大を主張して譲らなくなっていた。八月一四日夜の閣議において、米内は不拡大主義の消滅、紛争の全面化を主張し、さらには南京占領にまで言及したのであった。これに対し、杉山元（一八〇―一九四五）陸相は南京攻略の重大性、困難性を指摘し、不拡大方針の堅持による紛争解決を唱え、また広田弘毅（一八七―一九四八）外相、賀屋興宣（一八八―一九七七）蔵相も紛争不拡大の意見であった。しかし、米内は財政上の説明をする賀屋蔵相を怒鳴りつけ、その話をほとんど聞かないままに興奮する一幕もあったという。この八月一四日の米内の強硬姿勢が、翌一五日の日本政府のそれまでの不拡大方針の放棄なら

《執筆者紹介》(執筆順、\*は編著者)

\*黄 自進 (こう・じしん) 序・第2章

1956年 生まれ  
1989年 慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了。博士(法学)  
現在 台湾中央研究院近代史研究所研究員  
主 著 『蒋介石と日本——友と敵のはざままで』 武田ラッダムハウスジヤパン、2011年。  
『近代日本のリーダーシップ——岐路に立つ指導者たち』(共著) 千倉書房、2014年。

加藤聖文 (かとう・きよふみ) 第1章

1966年 生まれ  
2001年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。  
現在 人間文化研究機構国文学研究資料館准教授  
主 著 『満鉄全史——「国策会社」の全貌』 講談社選書メチエ、2006年。  
『大日本帝国』崩壊——東アジアの1945年』中公新書、2009年。  
『満蒙開拓団——虚妄の「日滿一体」』岩波現代全書、2016年。

劉 傑 (りゅう・けつ) 第3章

1962年 生まれ  
1993年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。博士(文学)  
現在 早稲田大学社会科学総合学院教授  
主 著 『日中戦争下の外交』吉川弘文館、1995年。  
『中国の強国構想』筑摩書房、2013年。

姜 克實 (jiang Keshi) 第4章

1953年 生まれ  
1991年 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)  
現在 岡山大学社会文化科学研究科教授  
主 著 『石橋洋山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1993年。  
『近代日本の社会事業思想——国家の「公益」と宗教の「愛」』ミネルヴァ書房、2011年。

相澤 淳 (あいざわ・きよし) 第5章

1959年 生まれ  
1991年 上智大学大学院外国語学研究科博士後期課程満期退学(国際関係論専攻)。博士(国際関係論)  
現在 防衛大学校防衛学教育学群教授  
主 著 『海軍の選択——再考真珠湾への道』中央公論新社、2002年。  
『岩波講座 東アジア近現代通史——日露戦争と韓国併合 19世紀末—1900年代』(共著) 岩波書店、2010年。

〈日中戦争〉とは何だったのか

——接眼的視点——

2017年9月30日 初版第1刷発行  
2017年11月30日 初版第2刷発行

(※印省略)

定価はカバーに  
表示しています

編 著 者 黄 劉 自 建 進  
編 著 者 戸 部 良 輝  
編 著 者 杉 田 啓 一  
印 刷 者 坂 本 喜 杏

発行所 株式会社 ミネルヴァ書房  
607-8494 京都市山科区日ノ岡麓谷町1  
電話代表 (075)581-5191  
振替口座 01020-0-8076

©黄・劉・戸部ほか、2017 富山県インターナショナル・新生製本

ISBN 978-4-623-07995-7

Printed in Japan